

水に浮かぶ蓮の花。鮮やかな朱の橋。潤しい草木に隠れて囀る鳥の声——それは一見、完成された水豊かな庭園のようだ。

蓮の花に乗る黄色の蛙。朱の橋の向こうに藍の橋。壁の外から聞こえる賑やかで欲望にまみれた雑音——完成とは一体何なのかと分からなくなるほどに混ざった景色は、まるであらゆる絵具をこれでもかと混ぜ尽くしたかのよう。

混沌と化した庭園にひっそりと佇む小さな離れで子供が一人、沈んだ顔を浮かべていた。顔立ちは幼く、少年にも少女にも見て取れる中性的なその姿を見た大人たちは、あらゆる欲を子供にぶつけていた。子供はそれ拒む事はできない。それは単に相手が大人で、非力な子供では力負けするから——という訳ではない。

この庭園の外は遊郭となっており、さらに遊女達を守るようにして白亜の壁が周囲を覆う。各部族から集められた女性に、力なきものが纏わりつかぬようにしてできたこの城は、城主以外には監獄だと感じるだろう。

女性の花園にいるこの子供は、少年という異物であった。卑しい笑みを浮かべて寄ってくる来賓は男女問わず、少年を選んできた。

少年は自らの人生を諦観してしまったのか、水面に映る生気の無い顔をずっと眺めるだけであった。

そんなたいいけな少年を眺めるだけで満足する女性はこの世にはいない。だから、偶然目についた少年に、彼女は歩み寄った。



水を映した己の瞳が端に映る異物を捉えた。柳のようにたおやかな動作でありながらも、性格の強さを感じさせる黒の瞳。全身を着飾って一つの商品として売り込む遊女が、少年に問いかけた。「人気者が一人、沈んだ顔をしておる。そなたのその表情が客を喜ばせる事になろうとは……つくづく世の中は矛盾を好むものよ」

その口調に同情の匂いは感じない。世の中を憂いているようで、それ以上に愉しむ何かがある。少年は幼いながらも、人の機微には聡い。それは悲しき出自故か、歪な経験故か。

少年は答える事無く、水面から女性へと顔を向ける。そして驚いた。

この世の中にはこんなにまで美しい人が存在するのか、と。他の遊女達が見たら逃げ出すほどの完璧な容貌。抱擁力のある豊かな胸にほっそりとしたなめらかな足。そしてこの女性の真価は姿形だけにあらず。——自らを理解し、自らを發揮し、それでいて世に楽しみを見出す。その姿を見ただけで、少年は女性に纏った輝かしい個を感じ取った。即ち、初対面の相手に抱かせる圧倒的な何か彼女には備わっているのだ。

「言っておくが、妾をそこらに蔓延る遊女とは一緒にされとうない。ここでの字は婀娜あだ、覚えておくといええ」

少年が口を開く前に、婀娜は瑞々しい唇から言い放つ。

「花魁ではあるが、妾は相手を選ぶ事ができるからのう。因って、妾に不遜な振舞をした暁には、悲惨な人生が待っておるぞ？」

袖口から扇子を取りだした婀娜は、奥ゆかしき女性のように口元を扇子で隠す。一連の動作が自然でありながらも、個を主張してくる異質さが際立つ。

得体も知れぬ違和感に呑みこまれかけていた少年は、

「その割にはえらく笑みが深いように思えます。貴女様は私がどのような人物なのかはつきりとわかっておいででしょう。おわかりになった上で、こうして私を弄ぶその魂胆は、私如きには到底窺い知れぬものでしょう」

丁寧でありながらも、その違和感から抜け出そうと抗った。

「そう僻むな。妾が先に名乗る事など滅多にない。ここは喜ぶべきじゃ。互いに退屈な陽光の時間。たまには人らしくあるのも悪くない」

不遜ともとれる少年のあがきを、婀娜は懐の広さで包み込み、
——ついてまいれ。

婀娜はゆったりと歩きだす。婀娜の世界に包み込まれた少年は彼女の後を追うしかなかった。

「敗者の文化は強者によつて悉く改竄され、こうした世界ができあがる。人工美の庭園と言うのもそんなに悪くないが、さらに着飾ろうとする者の趣は妾でさえもついてはいけぬ。己が道をまっすぐと歩き続ける事は中々に難しい事じゃ」

婀娜は庭園の池にかかる小橋を歩きながら、その言葉を口にした。橋の手すり部分には鮮やかな朱に金の装飾、さらには翡翠を埋め込んでいる。手すりの始まりと終わりは葦のように渦を巻いており、足元の橋板には立派な鷹が描かれている。

こうした世界、文化は際限なく吸収され、元の文化で暮らしていた者は順応しない限り、遺物に取り残されてしまう、という事なのか。若しくは、婀娜のように強き者は周囲を屈服させ順応させる事を示唆しているのか。

「上塗りされていていった文化も、立派な文化であります。人である限り、世界は常に動き、想像を超えた見知らぬ姿になっていくものです」

少年はこの先を深く考えず、万人受けする答えを返す。

「先人達もこうして負けるとは思わなかったようにのう。……しかし、そなたはどちらになるのかのう？ 妾はそれがひどく気になって、こうして話しかけた訳じゃ」

婀娜は歩みを止め、この先——深緑に佇む庭園の端にある景色を指して訊ねた。

その先には、この国には存在しない草花が広がっていた。ありとあらゆる植物が人の手を借りて、木々を壁にして隠れて成長している。

「……この場所を他に知っている人はいますか？」

「そう殺気立てるでない。商人から盗んで、さらには他の者から目を盗んで栽培している事を咎めるつもりはない。妾は一度気になったら追求せずにはいられない性質だけじゃ」

掴みどころの無い、それ故に恐ろしき人物であると、少年は婀娜をそのように評した。眼前に広がるは、この世界では珍しい草花。咲き乱れるこの正体を知っているものがいるならば、とても恐れるに違いない。それは美しさを超えた、純然たる恐れから来るものだ。

「——徒花あだばなになるか否か」

「……何の事ですか？」

但し、少年にとってはそれきしの事で恐れるに足りない。何故ならこの草花の意味以上に恐ろし

いのが、婀娜という人物だったからだ。

そんな婀娜からの突拍子の無い展開に、少年は堪らず訊く。何もかも少年の企てを見透かしているような婀娜に、少年は警戒せざるを得ないのだ。

「たとえその花が美しくても、蕾のままであれば美しさに惹かれる事はできぬ。たとえ咲き誇っても、見るものがいなければその美しさを伝える事はできぬ」

「……私にはやらねばならぬ事があります」

「やらなくても良いという道も続いております」

婀娜は少年の成果を背にして、少年に諭す。

「そなたの冒険に果たして先はあるのか。先を見出さぬままの旅路は死と同義じゃ」

「先なんて誰しもあるかわからないですよ。道の先に光が見えたとしても、それは誘蛾灯かもしれない。光があっても闇が広がっていても、関係ないのです！ やらねばならぬ事があると気づいたのなら、やらずにいるという道は苦痛でしかありません！」

少年は憤りを隠さずに婀娜に詰め寄った。——負けてはならぬ、吞まれてはならぬ。少年よりも背が高い婀娜に怯えを一切見せずに、少年は本心を語る。

「私がやらねば、駄目なのです。尊厳を穢され、嘆きながら死んだ彼らの為にも、やらねばならないのです！」

「息巻いている所悪いがのう——」

——やらねばならぬと燃える人間が、水面を眺めるだけの暇が果たしてあるのか？

「そ、それは……」

婀娜のその言葉は、少年に動揺を与えた。少年でも蟠っていた不安定な感情を一刺しする鋭い言葉であったのだ。しかし、続いたのは責め立てる言葉でもなかった。

「そなたは見付けてしまったのだ。復讐を天秤にかけるほどに大事なものを。……それが何なのか、妾にはわからぬ。だからのう——」

その証拠に、婀娜は少年を抱擁した。まるで実の親子のように慈しむ優しき抱擁だった。

「——妾は悩むそなたに声をかけたのじゃ。一つ、昔話をする」

少年は突然現れた優しさに慄くばかりであった。婀娜は少年の頭を撫でながら語る。

「妾の友人は、親が謀反を企てた罪で残した娘共々、里ごとを滅ぼされた。失望していた友人のもとに、一つの噂が入り込む。曰く、その里に少女の姿をした宝の番人がいるとな」

「……その友人はどうなったのですか？」

「一縷の希望を抱いてしまったのじやろうな、馬を盗んで旅立った。そして帰ってくる事はなかった。里の外れに盗まれた馬が繋がれ、里の中にはかつて鮮やかだった衣服が血糊で汚れ、すぐ側には憐れな骨だけが見つかったそうじゃ。……友人が何を思って果てたのかはわからぬ。番人がその場にいなかったのだから、案外満足する結果を得られたのかもしれない。……」

「つまで友人を想っていれればいいのか、それがわからないのじゃ」
悲嘆にくれる声に、少年は安堵した。どこか孤高に感じた婀娜が、弱々しい事に対してだ。そして、少年の為に打ち明けてくれた事に。

たとえこれが演技であったとしても、何か策略があったとしても、少年は婀娜を信じるしかない。この場所が露見されれば、少年の命は終わる。この場所を破棄しては、少年の意味はなくなる。そ

れならば、久しく拒み続けてきた『信じる』という事に身を寄せた方がよっぽど有意義だ。

打算的な心理処理に、少年は嫌悪する。もし自らを縛る戒めが解ければ、この婀娜の感情を素直に受け取れる日が来るのかもしれない。——だから、今は無理なのだ。

「……私がどのような経緯で徒花になったとしても、お優しい貴女は覚えてくださるでしょう。復讐であれ、あの方への羨望を選んだ道であっても、貴女は苦しみながらも見守ってくれる」

少年の言葉を受け、婀娜はそっと少年から離れる。

「妾が苦しめぬように、見えぬ先を見据えろ。光に色があるように、闇にも必ず色がある。見えぬと思うのは必ず己が起因じゃ。手段を尽くした上で、どちらかを選べ。二兎を追うものは一兎をも得ず、——というのはここぞという時の欲が足りずに揺らぐから起こる事なのじゃ。——この婀娜の言葉、努々忘れる事が無きように」

少年が見たのは、先程の弱々しさが夢であったかのような、強き女性の姿であった。しかし、少年は知った。この強さの中に、弱さと優しさがある事に。

少年は婀娜の言葉をしっかりと心に刻み、笑顔で感謝した。



あの日からだろう、どの道を選ぶにしても必ず自らが生きて、そして彼女を悲しませてはならないように苦心するべきだという事に気づいたのは。

少年は遠くに聳える尖塔を見据える。そこには復讐に燃えた少年を迷わせたあのお方がいる。次に、庭園の外の遊郭を思い浮かべる。夜になる度に、地獄と感じたあのある場所には婀娜がいる。そう

思うだけで心が軽くなるような気がした。

しかし、時間はあまり残っていない。少年の、少女と見間違ふほどの儂い美貌は月日に奪われていく。無くなってしまうえば、この地を離れなければならない。その先は新たなる町か墓下か。

そうなる前に、少年は動きださなければならない。結局、何もしないという道は失われてしまった。どの道も多大な危険を冒す事になる。

「それでも私は生き残らなければならない。それが一番難しい事を知りながら私に諭した婀娜は悪い女です。そして私がやろうとしている事に目を瞑るなど、きっと婀娜は傾国の美女として後世に名を馳せるでしょう」

少年は笑いながら、草花に水を遣る。この植物が手助けとならん事を期待しながら。



あるいはもう一つの野心。

婀娜は少年の行く末を心配し、そして期待していた。少年の周りには数奇な因果——少年から全てを奪おうとしたあのお方に、そして目の前にいるこのお方。

「……妾と同じ駒を漸く見つけた。だから、妾に止める理由はない。そなたが如何にあの少年を大事に想っていても、少年はその想いが強い程そなたを救おうと躍起になる。もう止められぬ」

尖塔に軟禁された姫君を前に婀娜は語るが、その姫君は悲しげに目を伏せるだけで何も言わなかつた。

「妾にも野心がある」

婀娜は決して忘れはしない。長い歴史の積み重ねでできた美を。ありのままの自分をさらけ出す事のできた小さな社会を。居場所を守りたいと思い、恐る恐る外の世界に飛びだした一時の冒険心を。消え去ってしまったあの場所を。復讐を共に誓った友人の死を。

「再びあの世界に相見える事ができるのならば、少年の悪に全てを委ねても良い。たとえこの身が全てを竦ませる悪鬼に堕ちようとも手を差し伸べてやろうぞ」

婀娜は笑いながら、決意する。この言葉が蹂躪された世界を蝕まん事を期待しながら。